大川美術館ニュース

ガバ橋

第144号

2025年3月31日発行
公益財団法人　大川美術館
〒376-0043　桐生市小曽根町3-69

松本竣介《青の風景》1940年、油彩・カンヴァスボード、23.5×33.0㎝

ことば　144

絵でも深い翳ができるためには、どんなにたくさんのことを考え想はなければならないか。

（松本竣介「日記」から1940年2月13日）

今号の『ガス燈』では、大川美術館のコレクションによる展覧会を開催いただいた碧南市藤井達吉現代美術館の大長悠子氏、アサヒグループ大山崎山荘美術館の森田明子氏のお二人に寄稿をお願いしました。ここに改めまして謝意を表します。

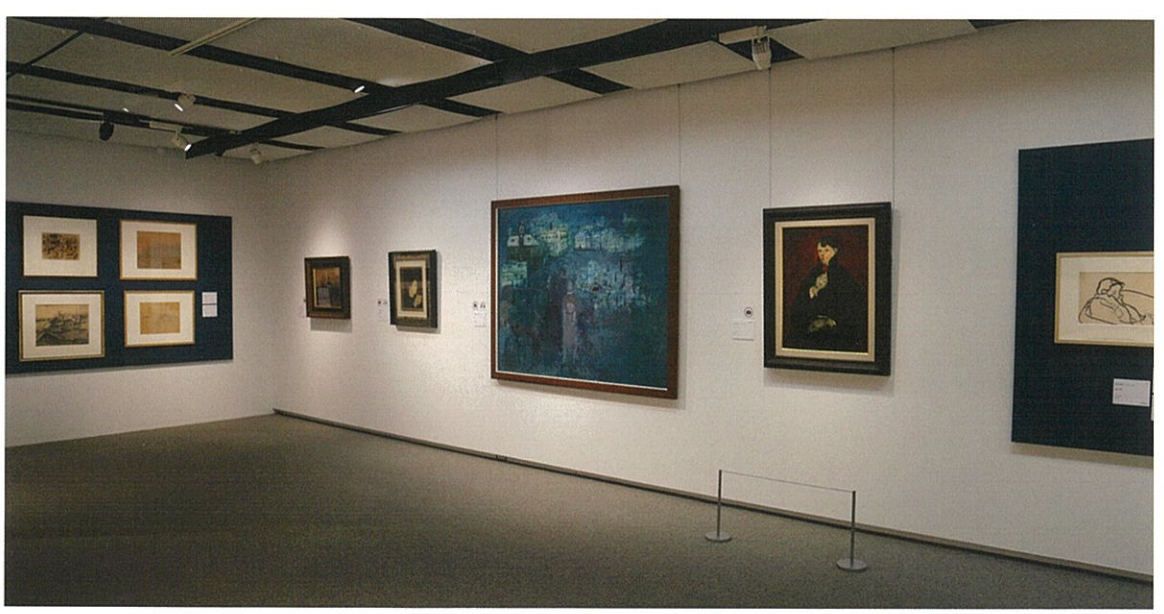
碧南市藤井達吉現代美術館

「松本竣介《街》と昭和モダン」展を振り返って

大長 悠子

日本の近代美術史に燦然ときらめく一等星、松本竣介の輝きを一層強く感じた夏であった。松本竣介《街》は大川美術館のコレクションを代表する1点である。普段は常設展示されているため、この作品を同館以外で見られる機会は多くない。碧南市藤井達吉現代美術館で昨夏開催した「松本竣介《街》と昭和モダン—糖業協会と大川美術館のコレクションによる—」展（会期：2024年7月20日～9月8日）は、この《街》を展覧会の起点としたものである。大川美術館の田中淳館長による企画で、「昭和モダン」をテーマに公益社団法人糖業協会と大川美術館の両コレクションから選りすぐった日本の近代洋画140点を一堂に会した。5章からなる構成は、第1章「自然をながめる」で風景画を、第2章「テーブルの上の物語」で静物画を、第3章「松本竣介」で街とモダンガールを、第4章「人の形」で人物画を、第5章「まだ見ていない『かたち』」で抽象画を取り上げており、主題によって章立てがなされている。展覧会の趣旨については本展図録の田中館長による巻頭文に詳しいが、ここでは開催館担当として実際の展示状況や来場者の反応に触れながら本展の内容を振り返ることとしたい。

まず冒頭の第1、2章では主に糖業協会のコレクションが並んだ。オフィスに飾ることを目的に収集された作品は、穏やかなものや華やかなものが多く、サイズ感もよく似ている。そのため、ともすれば展示室の壁面が風景画や静物画の単調な連続ともなってしまいかねない。しかし、章内でさらにモチーフに着目してセクションを分け、景勝を描いたものや身近な庭の草木を捉えた作品などの背景を昭和史に照らし合わせて紐解くことで、「昭和の風景画」、「昭和の静物画」に対して来場者に新たな視点を与えていたのではないかと思う。藤島武二、梅原龍三郎、里見勝蔵など官展の巨匠から在野の雄まで、洋画史を彩る錚錚たる顔ぶれに、来場者からは「思いがけず有名な画家たちの優品を多く見ること


松本竣介の《街》と《黒いコート》展示風景

ができて幸運だった」という声もいただいた。

本展のハイライトとなるのが第3章「松本竣介」で、その軸となるのが1938年に描かれた《街》である。野田英夫やドイツの社会諷刺画家ジョージ・グロスの影響が指摘されるように、青を基調としたこの作品の画面には、ピンク色のワンピースを着た女性や彼女を取り囲む街並み、人々など、それぞれのモチーフがモンタージュの手法によって大小様々に重なり合って表現されている。特筆すべきは、幻想的で洗練された「都会」のイメージとともに、街を包む微妙な不安感までもが、青く澄んだ皮膜に覆われるように画面に留まっていることである。人々の西洋的な文化への憧れと戦争を目前に控えたほの暗い雰囲気が共存するところに、本展がテーマとする「昭和モダン」が象徴されている。愛知県でこの作品を見られるとあって来場された方も多く、作品の前で長い間立ち止まって鑑賞される方も目立っていた。展覧会の構成としては、《街》に描かれた都市とモダンガールそれぞれに着目してセクションを分け、竣介と他作家の作品をあわせて紹介している。しかしながら、当館の展示では注目度の高い竣介作品をまとめて見せるため、竣介による《婦人像A》や女性の素描も《街》と並べて展示した。これについては賛否両論あったが、概ね好評だったようである。また本展開幕直後、個人所蔵家のご厚意により竣介の《黒いコート》の特別出品が決まり、会期途中の8月8日より公開が叶った。この油彩による女性像は、もう一つの注目作として新聞にも取り上げられ大いに話題となった。このほかにも、モダンガールのセクションでは糖業協会所蔵の安井曽太郎《女と犬》や東郷青児《羊飼》などの人気作が揃い、来場者の目を楽しませていた。

展示の後半は大川美術館のコレクションが中心となる。第4章は、戦中戦後の人物表現の変化を巧みに捉えた作品構成が際立っていた。清水登之による戦死した息子の肖像画や浜田知明の版画など、戦争の影響を直接的に感じさせる作品は、昭和をたどる上で来場者にとって特に関心の高いものであり、反響が大きかった。さらに最終章では、難波田龍起をはじめ竣介と交友のあった同世代画家らの戦後の抽象的な作品によって「昭和モダン」後の表現の広がりを示し、来場者に鑑賞後の余韻を残していたと感じる。

第4章　展示風景

本展は、昭和前期の日本の洋画を、その時代や社会の文脈において並列し見つめることで、この時代の洋画表現の豊かさや奥深さを十分に感じさせるものであったと思う。そして、その中心に据えた《街》をはじめとした竣介作品が有する時代性と、色褪せない魅力を改めて知らしめる機会となったのではないだろうか。末筆ながら、大川美術館創設者でありコレクターとしての大川栄二氏の審美眼に敬意を表するとともに、展覧会の企画から開催まで全面的にご協力いただいた大川美術館の皆様、糖業協会及び関係各位に、心より御礼申し上げます。

（碧南市藤井達吉現代美術館 学芸員）

山荘と松本竣介作品との邂逅

森田 明子

アサヒグループ大山崎山荘美術館では、2023年に大川美術館で開催された「生誕110年記念 松本竣介デッサン50」（以下「デッサン50」と記す）展の出品作による展覧会「松本竣介　街と人　－冴えた視線で描く－」を2025年1月4日から4月6日まで開催した。岩手で育ち、東京で活動した竣介の個展が関西で開催されるのはまれで、おそらく2002年に大阪府枚方市の市立枚方市民ギャラリー（2021年閉館）において開催された展覧会以来のことと思われる（枚方での展示は、現在大川美術館の館長を務めておられる田中淳氏のご尽力によるものと聞き及んでいる）。

当館の本館（大山崎山荘）は、関西の実業家・加賀正太郎が大正から昭和にかけ建設した洋館を復元整備し、美術館として活用しているものである。山荘が政財界人をはじめ多くのゲストで賑わった時期は、竣介の活動時期とかさなる。東京と京都、東西の違いはあれど、同時代の空気感を

本館展示 導入部分

まとった竣介の作品は建物にしっくりと馴染んでいた。このような機会を与えてくださった大川美術館に心から感謝申しあげたい。

今回の展覧会は、本館1階と「夢の箱」（山手館）とよばれる安藤忠雄氏設計による約94㎡のコンクリート造りの展示室を会場とした。展示空間は大川美術館に比してかなり狭いうえ、登録有形文化財である本館は展示の制約が多い。大川美術館での「デッサン50」展と同じように展示することは望むべくもなく、大川美術館が構成された第1章から6章までの章立てはのこしながらも、順序は変更し、一部作品の展示替え（デッサン8点）も行った。

大川美術館は竣介の没後70年・開館30周年を記念し、いずれも「松本竣介」を冠した「アトリエの時間」「読書の時間」「子どもの時間」「街歩きの時間」というシリーズの展覧会を2018年から2019年にかけて開催、図録も刊行された。さらに生誕110年にあたる2023年に「デッサン50」を開催、と大きなスケールで竣介に向き合われた。対して当館では、本展1本において松本竣介という画家を紹介しなければならなかった。そのため章解説は新たに書かせていただき、できるだけコンパクトに竣介の生きた時代、人物像を伝えるよう努め、文才に富む竣介自身の文章を引用してキャッチコピーのように用いた。

竣介は、文章を書くことは人に伝えるためというよりも自己形成のために重要であり、絵も同様だ*と語っている。竣介の著述がまとめられた書籍*を通読して感じたのは、絵画だけでなく文章も竣介の表現の場であったということである。とりもなおさずそれは彼の読書量や思考力によるものであり、知識や思考は作品制作にもいかされている。竣介自身が「デッサンがあって形の創造される処に画家としての仕事がある」*と述べたように、「デッサン50」というタイトルが、デッサンがすべての源であることをふまえたものであることは想像に難くない。しかし展覧会名はあえて変えさせていただいた。当館で竣介を紹介できる貴重な機会である今回の展示が、単に「デッサン展」ととらえられてしまうことを懸念したためである。「冴えた視線で描く」というサブタイトルは、舟越保武が竣介の死に寄せて「類なく冴えた画家だった」**と評した言葉からイメージした。純粋で、理知的で、常に冷静に社会と対峙し

本館展示 6章